



シリーズ 子どもたちの発達

子どもの遊びと発達『3歳から6歳の認識発達過程の特徴と保育』

3歳から6歳の認識発達過程の特徴と保育 ②

(自分の有能性を確かめる時期)

3歳を過ぎた頃から、子どもは自分の世界を拡大しながら相手の要求にも応えるというような複雑な視点を持つようになります。

身の周りの物事を、単純に「〇〇は××だ」と1つの認識に留めて納得することではおさまらなくなっていくきます。

2歳児の頃によく見られた対比的認識の「もっともっと」「もう1かい」が、より好きなほうに比重が高まり、単純に自分が欲張り、他を押しつけてという自己主張から、相手も視野に入れて主張するような態度が出てきます。

「Aちゃん、1回やっていいよ。そのあとBちゃん(自分)が2回ね！」とか、たくさんあるカードの1枚を「分けてあげたら？」と要求されると、「これとこれならいいよ」と、その要求に自分を調整しながらも、自分のお気に入りのカードの確保はがっちりしていて、その中からは絶対にあげないなど。

これらは3歳児頃からの発達の大事な特徴で、自分の世界を大事にしながらも、もう一つの世界を相手に配る、開かれた、拡大していく自我の第1歩なのです。

つまり、調整の必要な(あるいは選択の必要な)2つのうちの一方がさらに「もっともっと」と比重を高めていく「もっと欲しい」「もっと好きだ」という、物事への評価や気持ちの区別へと進んでいく過程なのです。

区別という認識がされていくと、「もっともっと」「いっぱい」と感じていたい「大きな自分」「大きくなりたいたい自分」と、現在の自分との矛盾も出てきます。

ですから、わかっていること、予測できること、でもイヤ・・・、でも違う・・・などに折り合いをつけるのも困難です。

そう、自分の中に葛藤が大きくなるので、場合によってはこれまで以上に「わからんチン」に思えたりもしますし、「何でもわかっているくせに、何でそんなワガママをいうのか？」と、大人はその子の性格や振る舞いの悪さなどといった捉え方をしてしまわないように注意したいところです。

「小さかった自分」から区別して「大きな自分」でありたい願望は、「みんなと同じようにしてみたい・・・、でも、できるかな？」「お姉ちゃんみたいになりたい・・・、でも赤ちゃんみたいに甘えたい」という行動に対する二分的な評価を自分でも加えながら、「そう見られる自分」の意識もあることで、反抗とも自己誇示とも思えるような態度が現われがちになります。

そうした願望の象徴である、「目の前の具体的な活動」を通して、具体的な目の前の人と今ある自分の「ねうち」をつくること、確かめることを強く欲するようになるのです。

だから、この時期の子どもは多かれ少なかれ、みんな自分の有能性を確かめることを、あらゆる場面で試していくのですから、大人の見方によっては「あらゆる場面で悪い」ということになりかねませんね。

(大人は「こたえ」を決めないで)

たとえば大人からみれば、たかがカードの独り占め！「欲張りダメヨ、たくさんあるから分けてあげなさい」と決着つけたいところですが・・・。

いやいや、それは子どもにとっては重大問題！ だって、「この世でボクは有能か?!」を試しているのですから、引き下がってしまったら敗北です。

ボクが(ワタシが)区別して働きかけることができること、好きなことが、より好きであること、それらはその子にとって自分自身を確かめる全てでもあります。

先ほど述べたように、この時期の認識過程の発達特徴は「自分の世界を大事にしながらも、

もう1つの世界を相手に配ることに開かれていくことです。

でも、まだまだ未熟なので自分の世界を大事にしようとすると、なかなかもう一方で相手に配ることができない・・・どうしたらいいのかわからない・・・、ということになるのです。

どの子ども1つの発達の節目を越えるには、練習が必要なのですよね。そのことを大人がどれくらい受け止めたかで、節目越えはスムーズか、険しいか???

その子が「自分」を中心にすえながら、一方で他者にも立場や気持ちを汲み取った行動として配ることを助けていく意識を大人は持ちたいと思います。

たとえば、あるおもちゃを独占しているような場合、「Aちゃんの！だめだよ！」と言っている子に、「みんなのよ」とか「お友達も使いたいって」などの、『貸したり分けたりできなければ、あなたは悪い子』という区別（評価）にならざるおえない対応をすれば、当然子どもは自分の自我を守ろうとするのですから、ますます強く抵抗するでしょう。

大人と要求がぶつかり合って頑固になるより道がなく、それでも大人に強行に要求されると暴言、投げるなどの不適切な行動にエスカレートするかもしれません。

すると、お互いがイライラするしかなくなってきましたし、せっかく自我が開けて拡大しようとしている芽を別の葛藤関係へとスライドしてしまい、関係性は混乱していきます。この時期は、「そうか、Aちゃんのか～。そりゃ、そうだね。」と、いったんはその子の自我を受け止めつつ、「じゃ、こっちの別のをちょうだい」と、互いの要求が真正面からぶつからずにやりとりできるバイパス道路をつくって いくようにしたいですね。

「これならいいよ」となった時に、「じゃ、Aちゃんがどうぞってあげてくれる？」と、自分が他者のために配ることができた、そんな行動へと働きかけてあげてほしいと思います。

子どもは、実は自己主張の世界と他者の気持ちを取り込んだ世界で折り合いをつけることができる、「さらに大きな自分」になれることをちゃんとどこかでわかっています。

だから、別のもので折り合いをつけることができただけで、さっきは貸せなかったおもちゃも「これだけならいいよ」と先につくったバイパスを通して自我を広げることができます。

いったんは、大人に助けられてバイパスをつくるのですが、Aちゃんのような3歳児に特有のこうした自己主張は、少しずつそのバイパスを自分で構築していく練習をしたいわけです。

つまり、2歳児までの自己主張の強さ、「〇〇ではない××だ」といったところで自我の育ちを見るのではなく、YESかNOかの選択では納得しかねる、自己矛盾も含めた自我の拡大に目を向け、『相手の要求も受け止め、他者との間で調整できる』教育的援助を大人は行いつつ「あっちより、こっち」「こっちを、もっともっと！」と自分で選び、自分で決め、自分で重みづけをしていく自我であってほしいと願いたいのです。

そうした自我の拡大を十分に潜り抜けて、自分の有能性を確信していく先に、『具体的な事柄が目の前にない場合でも相手の気持ちや立場を想像できる』という抽象的思考が可能になっていくのですね。

子どもの発達にひとつ跳びはない、大事に一つ一つの節目を越え、その子の育ちを積み重ねていく手伝いを、私達大人ができるといいなと思います。

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage
園長 日下部樹江

